

# スズキのついで

同僚の二人と大学近くのレストランで昼食を取ろうとしているところへ、数人の学生らしい一群がどどどとはいりこみで来た。やはり騒音かと思っていると、

われわれ三人の周囲をめぐるといふ間に取り囲んだ。部長も赤顔目もないし、なにか相談にでも来たのかと聞くと、「あなたは先月の教授会でけしからん提案をしたから、即座に懲らした」と答える。何によって、礼付書の教官が教授会の内容をすっかり流したのかなあ、と怒る程もなく、誰(け)ったり引つ張ったりして、無理矢理に前外務省同様の大学構内に連れ込まれ、荒れ果てた大教室に閉じこめられた。抵抗した二教授は見ておれない仕打をまげ、何人かがかつぎこまれた。神聖なる教室は、今や教官を擁護する場所ではない。押しつけるしごきのタコ部屋に一変する。かつて映画で見た暴力団のリンチの場面が頭をかすめる。二月八日の出来事である。

筆者は病院の病室のうちに、高血圧で最低の体調だったので、目撃出来るが医室に見せると要求し、やっと近くの医者の診察を受けられたものの、直ちに健康の勧告もけられ、十時間の静養と自戒ったのである。「お前ら、おれたちの要求をのまなければ何日でもカンヅメだぞ」と、音頭をとるリーダーを数分難に取り換えて、騒音の騒ぎをい

つせいに浴びせながら、同じことを何回かでも繰り返す。喉が切れ、心身ともに疲れ果てて伏魔すると、一段と大きな罵声

を振り上げ、目をくりあげ、こぶしを振り上げて脅迫する。とちも同じ大学の学生と教授間のやりとりとは考えられない。理学院の教授がこれら文字画学生に罵辱と暴力を受けるいわれはない。教授会閉鎖中の文学部教授間は、ついに十時間の罰、近付きもしなかった。

世にいわれる「閉校」は多かれ少なかれ、これと同じものである。学園すなわち暴力の町という事情がすでに社会通念になつてゐるのか、即座に同じ大学はかえって批判の対象になる。無理矢理押しつけられる「懲罰」は、自主的に受け入れたと誓約せられ、社会には三日月を並べ立てて弁解に執務める。真実を擁護する学者が、大学存亡に直向してゐるとはいへ、暴力に屈して顔面けたをばななかないにくい。現状が緩くなら、日本の大学はすべて共産党支配下にはいる目も遠くない。学園では、暴力は雷

## リンチ同然の学生団交

ゆき之の 信 之 福 田

言で遠慮するのが正しく、暴力で曲げられた罰は一刻も早く止すべからざるである。

大学の改革が、いま流行の学生参加で無理できるのなら、教授の目給を減らし、学生の奨学金をふんと増額したらよい。しかし、この初歩的な高度職業社会に適合する大学は、高度の専門的訓練と広い学問的教育を備えたプロたちの手ではなれば建設できないのだ。

(東京教育大学教授)